



# コーちゃん・オーちゃんの 「見つけた！豊岡元気人」



人気のオペラの講座



夢但馬2014推進協議会会長としても活躍。  
但馬の宝を次世代へ



市歌を斉唱(豊岡市成人式)

## 大好きな音楽の力で

## 豊岡・但馬を元気な地域に！

ミュージカル・第九などの歌の指導やオペラの解説などで、豊岡・但馬の音楽や文化の発展に尽力している、情熱的な男性を紹介します。

藤原俊輔さん(74歳)戸牧

兵庫県地域文化団体協議会や但馬文化協会、夢但馬2014推進協議会、第九をうたう会、但馬ミュージカル研究会など、各種団体の会長等を務める傍ら、音楽の指導などで活躍しているのが藤原俊輔さんです。

### 歌うことが大好きな少年

「いい声で歌うね」と近所で評判だった藤原少年。歌うことが大好きだったそうです。中学校では、バスケットボールに打ち込みました。「たった一つのボールを自在に操り、どんな形でもいいのでかごに入れることが快感」と振り返ります。しかし、バスケットボールの経験が、後にピアノを弾く障害になることを想像もしませんでした。

### 誤診、そして苦悩

高校1年生のときに「結核」と診断されました。結果的に誤診でしたが、自宅療養と入院を繰り返した、1年間高校を休みました。このとき藤原さんを支えたのが、大好きな音楽でした。

音楽教師に憧れるようになり、復学後は教員免許を取るために、東京の芸術大学(音

楽専攻)を目指しました。入試に必要なピアノの演奏。弾いたことがない上に、バスケットボールの影響で指が固くなり、繊細に鍵盤を弾ける状態ではありませんでした。「涙ぐましい努力をした」一取りつかれたように練習曲を弾き、芸大に合格しました。

大学では、五線譜の書き方や歌の勉強をしましたが、周りの学生に「競争心の塊、人の失敗を期待するような雰囲気」を感じました。「歌は楽しく歌うもの」という理想と現実とのギャップで、音楽を楽しめなくなっていました。

### 転機となったドイツ留学

芸大を卒業後、音楽に結論を出すには早いと思いい、ドイツのミュンヘンへの留学を決意。カバン一つで、国立音楽大学の門をたたきました。3月に渡独しましたが、大学の通常の入学は9月。大学に直談判し、特別に受験させてもらい、入学できました。大学ではドイツ語での歌、オペラなどを勉強。ドイツ人の先生や学生にかわいがってもらい、音楽の魅力を再発見できました。放送局の合唱団に声を掛

けてもらったり、ミュンヘンオリンピックの日本人選手村の通訳長を務めたりするなど、貴重な体験もできました。帰国後は、東京の音大に就職し、10年間、ドイツ歌曲、イタリア歌曲などを教えました。

### 人の役に立ちたい

近畿大学から教授の就任依頼を受けた藤原さん。「いつか親孝行をしたい」と思っていたこともあり、約30年前、教授を引き受け、豊岡に帰郷しました。生まれ育った豊岡で歌の指導ができることに、幸せを感じました。

豊岡では、但馬ミュージカル研究会や第九をうたう会の歌の指導など、多くの方に頼られました。「必要とされるなら役に立ちたい。やり出したら、自身が楽しんでる。疲れは感じない」と笑います。藤原さんは「ベートーベン」は耳の聞こえない晩年に、第九などの名曲を残した。曲を書いたのは若いときに音楽に精通したから。何でもいかに、継続して取り組んでほしい。人生の財産になる」と若者にエールを送ります。

※広報とよおか5月号(4月25日発行)から、コーちゃん・オーちゃんの「見つけた！豊岡元気人」のコーナーは、「Toyooka Topics-とよおかの旬な人と話題-」に変更になります。

# ま ち の 話 題

## 城下町のおひなさま 日本の風習・伝統に慣れ親しむ

出石史料館(出石町宵田)で特別展「城下町のおひなさま」が開催されています。

史料館は、明治時代の商家を利用した風情ある建物。大切に受け継がれてきた、明治期から昭和期までの9組のひな人形が、歴史情緒に彩りを添え、まるで過去に時間旅行したかのよう。

特別展を主催する出石皿そば協同組合理事長の石田伊久雄さんは「昔は親から子へ風習や伝統を伝えていたが、最近はそのような関係が希薄になってきている。展示を見て、子どもたちに興味を持ってもらいたい」と話します。開催は4月6日(月)まで。



▲応急担架の作成・搬送法や止血法などを学ぶ

## 但東で「自主防災組織リーダー研修」 みんなで命と暮らしを守る

3月8日、但東地域42区の自主防災組織を対象に「豊岡市自主防災組織リーダー研修会」を但東支所で開催。参加者は、心肺蘇生法や救急時の措置などを学びました。

奥矢根区から参加した谷口清喜(せいき)さんは、「AED(自動体外式除細動器)の使い方は、思っていたより簡単だった。搬送法の受講も初めて。実習は理解を深めることができ良かった」と感想を話しました。

本市地域防災計画の理念は「みんなの力で命と暮らしを守る」。共助の役割を担う自主防災組織の実践力アップにつながる研修となりました。



▲明治から昭和にかけてのひな人形が並ぶ

## 笑顔の輪

### ほんわかとした家庭の雰囲気、紙芝居を届けたい 昔ながらの紙芝居 かつう一座

「カチツ、カチツ、カチツ」。拍子木の高い澄んだ音が紙芝居の始まりを告げます。

「昔ながらの紙芝居 かつう一座」は、自作の紙芝居を中心に、市内で上演する女性5人のグループです。

社会福祉協議会のボランティアとして、さまざまな活動を行っていく中で、平成24年の「とよおか・こどもまつり」で、市販の紙芝居を上演したことをきっかけに一座を結成しました。



▲自作の紙芝居「鼻かけ地蔵」

作品へのこだわりは「家族のつながりの大切さ」を伝えること。話の中に、苦楽を共にする家族を登場させることで、ほんわかとした家庭の雰囲気を出すことを心掛けています。

保育園やデイサービスなどを中心に活動し、上演を重ねるうちに、地元の人や民話の紙芝居にして語りたいという思いが生じ、紙芝居を自作するようになりました。平成25年に「はじめてのおつかい」を作成。以降、「小便地蔵」「忘れてなんぼ」「鼻かけ地蔵」の3作を手掛けました。

絵と、複数の読み手による臨場感あふれる芝居が特徴で、評判は上々。上演回数は年々増え、最近では、年間15回から20回行っています。

「多くの人に紙芝居を届け、喜んでほしい」と話すメンバー。笑顔が輝いています。上演依頼は、座長の加藤清子さんまで。☎23-4897

※「笑顔の輪」の拡充版を市ホームページに掲載しています。  
※「笑顔の輪」は、今月号で終了します。